



Title	今古文經學に関する研究 [全文の要約]
Author(s)	吉田, 勉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14571号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81444
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Tsutomu_Yoshida_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 吉 田 勉

学位論文題名

今古文經學に関する研究

本論文は、清代の今文学派が標榜した「微言大義」なる語に着目して、今文学派の発展史、今古文經学の相違点に関する学説、及び今文家による具体的な經書解釈のあり方を探ったものである。その構成としては、序章において研究の背景と目的・方法を提示し、第一章・第二章においては皮錫瑞（1850～1908）・宋翔鳳（1777～1860）の言説から今文学派の発展史を考察した。第三章・第四章においては今文家の具体例として廖平（1852～1932）に着目し、第三章では今古文經学の相違点に関する彼の学説を、第四章では彼の具体的な經書解釈の方法を考察した。

各章の要旨をまとめれば、以下の通りである。

序章ではまず、本研究が対象とする今古文經学の学術史上における位置づけを概観し、それが漢代と清末民国期に大きく発展したことを確認した。その上で、小島祐馬・銭玄同らの指摘をもとに、今古文經学を考察するに当たっては微言大義の語がキーワードになることを論じ、特にそれが清末の今文学者によって標榜されたことを指摘した。このことから、今古文經学を考察するに当たっては、清末の今文学者に注目することが有効な方法となり得る。そこで本研究の方法として、清末の今文經学を中心に据えて、今文学者の微言大義に関する言説に注目して考察を進めることを提示した。

第一章「皮錫瑞の「微言大義」言説」では、上述の方法の出発点となるべき皮錫瑞の説を取り上げた。清末湖南の今文学者である皮錫瑞は、その晩年の著作『經学通論』において、『孟子』の記述を根拠に『春秋』の微言大義を定義している。この説は従来、微言大義に対する定義を代表するものとして扱われてきた。皮錫瑞はまた、自身の定義を『孟子』の趙岐と朱子の注を引用しつつ論証しているが、かかる定義や論証の背景には、彼が生きた戊戌変法期の湖南省長沙における梁啓超（1873～1929）との交流や、葉徳輝（1864～1927）との論難を想定することができる。変法派の中心人物とも言える梁啓超は、長沙の時務学堂において『公羊伝』『孟子』を講じたことで知られるが、皮錫瑞の日記等を参照すると、彼が梁啓超と交流する中で、その説に啓発を受けている事実が明らかになる。このことは、皮錫瑞が『孟子』を根拠に『春秋』の微言大義を定義することとの関係を思わせるものである。その一方で、梁啓超に反対する立場にあった葉徳輝に対しては、論難を通じて『孟子』『公

羊伝』の重要性を訴えている。皮錫瑞が先儒の注釈を引用しながら自説を論証する背景には、このような反対派を説得する意図があったと考えられよう。ただし、変法期の皮錫瑞は、微言大義という語によって『春秋』を説いているわけではなく、その点でなおも晩年の『経学通論』の説とは懸隔がある。そこで、皮錫瑞の他の著作を参照すると、『春秋』の微言大義を初めて言明したものとして、省内の学堂における講義原稿『師伏堂春秋講義』を見出すことができる。『経学通論』の説は、この講義原稿を基礎としてまとめられたものと言うことができる。以上のような背景と過程によって形成された皮錫瑞の説は、清末の湖南という個別的土壌に育まれたものであって、あくまでも彼独自のものとして捉えるべきであると言える。すなわち、それを直ちに微言大義に関する公約数的言説とすることは留保すべきであると考えられる。このことから、個々の今文学者の「微言大義」言説を改めて丹念に検討し直すことの必要性が指摘される。

第二章「宋翔鳳『論語説義』の微言説」では、前章の内容を承けて、宋翔鳳の「微言大義」言説の特徴を探った。宋翔鳳は、微言大義を標榜する今文学のみならず、名物訓詁を重んずる漢学、すなわち古文学にも明るかったと評価されるが、本章ではその宋翔鳳が今文学に果たした役割を、やはり微言大義の語との関係から考察した。そもそも微言大義の語は、『漢書』劉歆伝の「夫子没するに及びて微言絶え、七十子終はりて大義乖く」（『漢書』藝文志にもほぼ同じ文が見られる）を出典とするものであるが、宋翔鳳はこの古文家・劉歆の説に反駁して、微言大義は決して滅びていないと主張し、その上で、『論語』各章の記述に基づいて微言大義の内容を定義する。その際の主要な論拠となるのが、『論語』公冶長篇の子貢の言「夫子の文章は、得て聞くべきなり。夫子の言、性、天道に与るは、得て聞くべからざるなり」である。宋翔鳳はこれを根拠に、孔子の思想を「得て聞くべき」大義と「得て聞くべからざる」微言とに大別する。そして、『論語』各章に対する彼自身の解釈をまとめた『論語説義』において、大義と微言の両者に対してより具体的な定義を下している。しかし、宋翔鳳の説を仔細に検討すると、その定義は『礼記』中庸篇を思想的根拠とするものであり、さらには、惠棟・錢大昕といった、彼に先行する漢学家の説に基づくことが明らかになる。これは、宋翔鳳自身の学術の特徴、すなわち、今文学と漢学の双方に通暁したことの表れと言えるが、より広く、今文学の発展史として捉えるならば、宋翔鳳は漢学家によってすでに唱えられていた萌芽的な「微言大義」言説を今文学の体系中に取り込み、今文学に発展の契機を与えたと評価することができる。

以上の二章にわたる考察を通して、漢学家によって先に唱えられていた微言大義の語を、清代中期の宋翔鳳らが今文学に結びつけ、その後、今文学者によってそれが一種の標語として共有されながら清末に至るという流れを明らかにした。

第三章「廖平の今古学と『春秋穀梁伝』」では、清末四川の今文学者である廖平を取り上げ、まずはその『今古学考』を読み解くことで、礼制により今文・古文を分類するという彼独自の今古文学説を整理した。廖平は、古学を孔子壮年の説、今学

を孔子晩年の説とする。これは、孔子が壮年には周の礼制に従おうとしたが、晩年には思考を改め、周制の積弊を救うため新たに自身の理想とする礼制を定めたとする考えに基づく。そして『礼記』中の王制篇は、孔子が自らその理想とする礼制を記したものだとする。したがって、王制篇の記述と一致する文献は、孔子晩年の理想、すなわち微言をよく伝えるものと言えるが、廖平によれば、その最たるものが『春秋穀梁伝』であり、その中の礼制は尽く王制篇と合致するという。このことから『今古学考』においては『春秋穀梁伝』がとりわけ高く位置づけられている。続いて、廖平が『今古学考』に前後して『春秋穀梁伝』の注釈書『穀梁古義疏』を著していることに注目し、該書に展開される『春秋穀梁伝』の成立・伝承に対する説を整理することで、その総体的な『春秋穀梁伝』観の解明を試みた。その結果、この点に関する廖平の説がやはり『今古学考』の『春秋穀梁伝』評価と緊密に関わっていることを明らかにした。

第四章「廖平の『穀梁伝』解釈——その旧注批判と劉向説の引用をめぐって——」では、第三章で明らかにした内容を基礎として、廖平の経書解釈の特徴を探った。廖平は『今古学考』において『礼記』王制篇と『春秋穀梁伝』との合致を説いたが、その一方で、『礼記』や『春秋穀梁伝』の代表的注釈者である後漢の鄭玄や東晋の范甯は、このことを知らずに経書の今文・古文を混同したと批判している。そして、それ以前の、劉向を代表とする漢人の説によって『春秋穀梁伝』を解釈し直すべきことを主張する。本章では、これら旧注批判と劉向説の引用とに注目して、廖平の経書解釈の中でも特に『穀梁古義疏』に展開されている『春秋穀梁伝』解釈を検討した。このうち、旧注批判の根拠は、『礼記』王制篇と『春秋穀梁伝』の礼制とが合致するという自説であり、廖平はまず、これに反する読み方をする鄭玄・范甯の説を斥ける。その上で、自身の経書解釈の方法としては、やはり自説を根拠として、二書の記述を対応させながら一方の記述によって他方の読みを確定させるという両文献の疏通を図っている。また『穀梁古義疏』において、劉向説は自説、さらにはそれを応用した経書解釈を補足し、立証するために引用されている。このことから、廖平の『春秋穀梁伝』解釈は、『今古学考』に述べられている自身の今古文学説を背景として、それを一貫させたものと言うことができる。